

譬は野菜菓物の展(抹消)覧あり此辺に心を入者自分作の薯とか梨子とかを持来り出来好けれハ夫々褒美を貰ふ随て得意(抹消)先も多くなり他人ハ就て其作り方を学へし此他土人の博覧会と云ひ牛馬礦物の為見物と云ひ夫々あり世間一般の人にも為見なり大概毎州に勸業博覧会あり重に耕作物牛馬等を持出す事年々なり」宅命(抹消)只(抹消)ハ(抹消)へし」政国の為人謹直なれハ何寄の事只是迄の家産を守り損失なき様取計呉は私に於て満足なり手紙の文上にて判するに読書の業ハ少し不充分と被思了解(抹消)ハ「す」さるれ共儘可笑文面あり少しく添心ありてハ如何尤も手紙を書慣さる為かも不知」爾今田舎に在九月中旬にハボストンに帰府すへし

御尊父様

武夫

92 明治11年8月17日 菊池長閑宛

第十号 八月十七日 (長閑注記)

第五号達す於くの縁組首尾能調たる由私に於ても何寄大慶政
 国よりも懇切の音信あり忝なく存す盛岡博覧会の催ありたる由
 此節ハ世界中博覧会の流行病伝染し当年ハ仏京パリス来年ハ何
 処翌年ハ何処と取々の噂あり其様に度々ありてハ善悪し年々催
 してハ入費を掛丈の益ある間敷かと思はる当国にてハ日本にて
 云ふ博覧会ハなし内外古今の混合物を陳へ見せるハ博覧館にて
 常に開置事なり時々催にハ何か一種の物を出合して見せる事

(長閑注記)

「十月十四日達シ日数五十九日也

十月廿九日此方八号ヲ以返事」